歴史哲學の問題（承前）

大西友太

二・カント哲學の復興

私は前節でヘーゲルはイデアの辯證法哲學においてカント哲學を歴史中心主義の哲學に發展したといはれてゐるけれども、嚴格な意味ではその辯證法は歴史哲學の問題を開展しえぬ。これにはイデアそれ自體の自己否定によるエクジステンツにおいて存在及び自己意識を見ることが根本條件とせられねばならぬのであつて、ヘーゲルの思辨的同一哲學を背後の實存的歴史哲學に切下げねばならぬのである點について述べておいた。カントがヘーゲルの歴史哲學の背後に復興せねばならぬといはれるのは、思辨的理性の認識に對する公平なる批判によつてその限界を明かにしながら次ぎの問題に進んでこの存在及び自己意識を明かにするからであつて、カントはこゝに自己意識の直接的明證によつて先天總合判斷の明證を明かにするのみでなくそれがまた同時に實踐理性の問題として歴史哲學の根本問題を解決する。私は本節でカントのこの問題について論じて見たいと思ふ。

私のこゝに一言斷つておかねばならぬことは、カント哲學の復興といふときはカント哲學全體に渡つての見通しを前提とせねばならぬから、今私はこゝに何等の見通しについても述べるところなく、かういふ問題を提出し、これによつてカント哲學の復興を論じようとすることは科學的でないと感ずる讀者は多いと思ふ。私はこゝに一言これについて辯明しておきたいと思ふ。私は昭和十二年から十四年にかけて本誌で『カントの先天總合判斷の最高原則について』といふ題で比較的に詳細にカント哲學全體について論じたことがある。勿論全體といつてもカントの先天總合判

斷を中心にして考へたものであつて、題め示す通りに認識論的に考へたものである。したがつて純粋理性批判を中心にして考へたものであるけれども、先天總合判斷の最高原則といふときは理念の無制約者にまで溯つて考へねばならぬのであつて、自然思辨的理性の二律背反の問題を媒介にして實踐理性批判の絶對自我の自覺の問題にまで進んで、カント哲學の根本問題について考へたから、私の右の論文は大體においてカント哲學の見通しをつけるものとなつてゐるといつて差支へないといへると思ふのであつて、私は右の論文を地盤にしてヘーゲルの思辨的同一哲學を吟味したがらその背後にカントの實踐的歴史哲學が復興せねばならぬ所以を論じて見たいと思ふのである。尤も右の論文では私はまだヘーゲルのイデアの自己否定の無の問題は明かに論じてない。多少この無について論じたことはないではないけれども、今回の論文のやうにこれを根本原理として先驗哲學を見てないから、今回の論文は前回の論文よりも根本において稍深く進んでゆくことになつてゐる。したがつて今回の論文は哲學的には前回の論文の續きとなつてゐるともいへると思ふのであるが、とに角私はこのやうな考へ方でカント哲學の復興を考へ、それから次ぎの二節卽ち歴史的事實の世界とカントの先驗統覺及び歴史主義と歴史哲學において歴史哲學の本質を明かにした上で、今日我々に與へられたる二三のこの哲學の問題について論じたいと思ふ。

しかしそれにしても、ヘーゲル哲學に對してカント哲學が復興せねばならぬといふやうな大問題を僅々この一小論文で論じつくすといふやうなことは不可能に近い問題であらうから、私は問題を限定して前節で論じたヘーゲル哲學の歴史哲學に關する批判から進んでゆきたいと思ふ。もし私の所論にして大過ないとするならヘーゲルの精神現象學で達した一切の有限的事物を無限精神に止揚せる立場は思辨的同一哲學としてイデアの否定契機による辯證法的歴史哲學は考へられぬといふことになる。私はこの點をなほ詳細に吟味しながら議論を進めたいと思ふ。思辨的同一哲學でゆきづまるといふのは、もと〳〵この同一哲學における否定契機の辯證法は許されないこと柄であるといふことに歸着する。どのやうな理由によつて然かいふのであるか。私はこれまで述べてきた結果、一應これについて說明せね

ばならぬ。ヘーゲルはイデアにおいてイデアと同一化された有限の無限的存在をイデアの否定契機として辯證法を考へるのであつて、そのかぎりではこの同一なるものをもつて同時に同一ならざるイデアの否定契機とするのであるけれどもこれはヘーゲルの大なる矛盾である。ヘーゲルがイデアにおいて一切の有限は永遠の眞理に達するといふことは眞理であるけれども、正直にいふときはイデアにおいて永遠の眞理であるといふことを思辨哲學的に考へるのみでは、イデアにおいてすべての有限は差別のない平等一如の眞理としていはゞイデアの想像的空間におかれてあるといふことを見るに過ぎないのであるからそれがヘーゲルの辯證法哲學においてのやうにイデアの否定契機としてイデアの他在を示すものとして、これを媒介にしてイデアがその自覺に達するといふことは考へられぬ。こゝに私はヘーゲル哲學に第一疑問があると考へる。もしかりにイデアの否定契機としてその辯證法を可能ならしめるにしても、たゞそれだけのことであるならば正直にいふときはカントがその二律背反について批評してゐるやうに如何ほど深く考へてもたゞ制約者と被制約者の關係が無限につゞくといふことが知られるのみであつて、被制約者から制約者に達し、無限的永遠者の自覺に達するといふことは考へられぬ筈である。ヘーグルはかういふ點においてはカントの二律背反の問題を簡單に考へてイデアの辯證法哲學を考案したものと考へられるのであるが、そこに大なる間違が潜んでゐる。

永遠は時間ではない。時間を空間に止揚せるものでなければならぬ。時間の多樣性を空間の全體性に止揚せるものでなければならぬ。この空間においてある超時間的なる永遠の眞理としてイデアは一切の多樣を自己自身の中に呑み込まねばならぬ。神において一切の有限は無限となるの外ないのである。しかし眞の永遠者は一切の多樣をたゞ自己の中に呑み込むのでなく、自己の中から發展してその呑み込める有限の無限を無限の有限として發展せねばならぬ。永遠者、神的なるものを時間的なるもの、地上的なるものとして現實的に發展せねばならぬのである。イデアに止揚せられてイデアの想像的空間において無差別的に存在するものに對してイデアその物が內在し、全體者の內在せるも

のとして無限の生命あるものとなさねばならぬのである。

ヘーゲルによるときは範疇は有限的規定であつて辯證法によつて初めて思惟及び現象の契機となるといふことである。悟性の範疇をイデアに止揚し、その否定契機として存在すると考へるのであるから、イデアの辯證法によつて思惟の契機となりえるといふことは怪しむに足らぬ。ヘーゲルにおいては一切がイデアにおいて同一であるといふ點においてこのことを見てゐるのである。一切がイデアの想像的空間において無差別的に同一存在であるといふ意味においていふことであつて、その無差別的イデア的存在が範疇的存在として一切の差異をもつ事實を示すといふ點については考へてゐるのではない。したがつてイデア的に明證であるものが同時に對象的に明證であるといふことを明かにしてゐるのではない。ヘーゲルの範疇が辯證法に合するといふことは對象的にいはれることではないのである。ヘーゲルのやうに範疇が辯證法に合するといふことはイデアの同一哲學においていふことではなく、エクジステンツなる實存においていふことである。範疇といふときはエクジステンツとして直接事實にかゝはるものでなければならぬ。ヘーゲルにおいてもそのイデアは直接事實にかゝはるものとして範疇でなければならぬ。イデアであると同時に事物にかゝはるものとして思辨的同一哲學的なると反對に、イデアににかゝはる範疇は絶對的差異を有せるものでなければならぬ。ライプニッツの單子の如きものがこの場合に考へられる。

人も知る如くライプニッツの單子はたゞ一つあつて二つなき獨自の小宇宙である。イデアと實存との結合せられたものであるけれども、同一哲學的に結合せられたものではなく、實存それ自身の立場において差異的に結合せられたるものである。イデアを實存の立場において所有するものである。否、實存の立場においてイデアその物を新らしき固有の形態に表現せるものといふことができる。そのかぎりにおいて實存は單子として小宇宙である。それ自體一切の述語を有せる主語である。主語となつて述語とならたいといふよりも、一切の述語を自己の中から發展することができるものである。單子は小宇宙として世界の一切の存在をそれ自身の中にもつものとしてはヘーゲルのイデアのや

うに思辨的同一哲學において考へられるものであらうが、一切を自己自身から發展するものとしては同一哲學で考へられるよりも以上にイデアそれ自體の自己否定において見られるエクジステンツ的存在でなければならぬ。世界の事實は單子としての歴史的主體の作る事實である。世界はそれ自體歴史を作る主體から成り立つてゐる。しかしこの主體には統一はない。それ自體外から何物をも受くべく、また與ふべき窓をもたぬ。まつたく獨自の存在である。ライプニッツはたゞ神の豫定調和によつてのみ結合せられてゐると考へた。單子はその形而上學的思辨的性格においては同一の性質をもつ絶對性の一面をもたねばならぬから、そのかぎりにおいてはヘーゲルのイデアにおいてあるものと見ることができる。イデアの想像的空間においてあるものとしてすべての差別なく存在するものと見ることができる。外から何物をも受けることなく、また外に何物をも與へる必要のない單一的存在として小宇宙であるといふことはヘーゲルのイデアに止揚せられた實體と考へることであるであらうが、同時に無限の差異を有し、宇宙に一つも同じ單子はなく、それ〴〵異なれる觀點から宇宙を作れるものであるといふことは、イデアではなくエクジステンツとして無限の差異を有せる存在であると見るものと考へる外はない。それ〴〵小宇宙である。ライプニッツが神の豫定調和によつてこの單子に全宇宙的統一があると考へたときは、神は單子を超越して外からこれを見るとゝもに内在して内からこれを照らすと考へたものと見ねばならぬ。こゝに問題がある。

無統一的存在の單子が豫定調和の共同體をもつについては單子それ自體は自己否定によつて自己の奥底に自己を超越する内在的超越の場所をもたねばならぬ。獨立的に存在するものはその獨立なるだけに自己否定によつて自己の奥底に自己を超越する共同的存在の場所をもたねばならぬ。ライプニッツの共同體は假定ではなく、世界歴史形成の論理的原理であるといはねばならぬ。單子はライプニッツの考へるやうに神の豫定調和の假定の下に全體として統一をもつよりも、自己の獨自の存在の奥底に自己否定の論理的必然によつて一つの共同體をもたねばならぬのである。無數の單子の歴史的主體の作る世界歴史には一つの統一がなければならぬ。神はライプニッツの單子をその世界に包ん

でゐねばならぬ。單子は神の世界において神から見渡されてゐねばならぬ。神は超越的に單子のすべてを見渡してゐねばならぬ。同時にまたすべての單子に内在してそれ〳〵その立場において調和的に活動せしめねばならぬのである。ヘーゲルのイデアが想像的空間に一切の存在を無差別的永遠において容れてゐるのと異なる。ヘーゲルの同一哲學のイデアよりもライプニッツの豫定調和の方が歴史哲學的に進んだ考へをもつてゐるといへる。我々はライプニッツの豫定調和を假定とせず、單子それ自體の内面的必然的に要求する原理と見ると時にヘーゲルよりも歴史の深き哲學的理解をえられる。

我々人間も勿論この單子である。我々は神の豫定調和ともいはるべき場所におかれたるものとして神それ自身に見渡され、したがつてそのかぎりにおいては神の最高の意圖にしたがつて世界歴史を作らねばならぬのであるが、外から神に見渡され、支配されながら神の世界歴史を作るのではなく、内から神に照らされて神の心を心としてこれを作らねばならぬ。我々は一切の人間がこれであることを知らねばならぬ。否、單子としてはすべての存在がみなこれであることを知らねばならぬ。しかし我々人間はすべての存在がこれであることを知り、その世界歴史を作れることを知りながらその世界歴史及びこれを作れるものに對する深き尊崇の念をもち、その根本的理念に對して深き宗教的信仰と堅き道德的決意を寄せえるものでなければならぬ。この點において我々はライプニッツの豫定調和を原理とする世界の中にありながら同時にこの世界を超越してこの世界の外にあるものとしてこの世界を外から見るとゝもに内には入つて一層深き自覺の立場からこの世界を作つてゆかねばならぬ。これが歴史哲學の大切な問題である。ライプニッツの世界歴史もなほ神の世界歴史を客觀的方面において見るものである。眞に主觀的方面において見る自覺史でないといへる。カントが復興せねばならぬといふのは、この點からいふならばカントはライプニッツの豫定調和の歴史觀をもなほ歴史を客觀的方面において見、對象的方面において見るものとして神の内在する人間の眞の自覺史でないのを自覺史の立場に轉廻するからである。

この間における理論は込み入つてゐるとゝもに大切であるから私はやゝ詳細に述べて見る。ヘーゲルの精神現象學における思辨的同一哲學から歴史哲學に進むことはまつたく不可能である。我々はその背後に出でゝイデアの超越的否定において初めて歴史哲學的に考へ得るのであるが、この點においてはライプニッツの單子の哲學の方がヘーゲルのイデアの同一哲學よりも進歩してゐるといへる。ライプニッツが單子の背後にある神の豫定調和を考へ、この調和においてすべての單子がそれ〴〵その立場において小宇宙としての世界歴史を作りながら全體的調和をもつと考へる方が進歩せる考へ方であるといへる。しかしこのライプニッツもなほ歴史の最後の眞理を對象的方面において見るものとして思辨哲學の領域を脱してゐぬ。思辨的同一哲學としてすべての單子を神の同一的根源に歸するに止まる。我々はこの根源から生ずるものである。そのかぎりこの一根源の歴史的世界の中にあるものであるけれども、この世界を見る眼をもつ我々自身の足場はこの世界の中にあるのではない。外にあるのである。内在的超越においてあるものとしてこの世界を對象としてもつものでなければならぬ。ヘーゲルの同一哲學に比較するときはライプニッツの個別的單子の立場は歴史的事實の世界である。ヘーゲルの世界歴史の事實を示しえる。ライプニッツがこの個別的單子の小宇宙の豫定調和を認めたときは、いよ〴〵その個別的單子の全體的統一の世界歴史を認め得る立場を見るのであつて、ヘーゲルの同一哲學よりも確かに深く考へる立場をもつてゐる。ライプニッツによるときはヘーゲルのやうにイデアにおいて考へるのではなく、エグジステンツにおいて考へるのであるから、世界のすべての存在は單子としてそれ〴〵その歴史を作る小世界をもつてゐるといへるのみでなく、それが豫定調和にまで溯つて考へるときは今日我々が歴史哲學上考ふべき問題は根本的には解決されてゐると考へることができ、ライプニッツがこの豫定調和に純粋なる自己意識を求めたときはこの世界史的なる歴史の主體としての自己意識を見ることができるから、ヘーゲル哲學において見るところの根本的缺點はライプニッツにおいて救はれてゐると考へられる。

しかしライプニッツにおいてはかういふ豫定調和の自己意識は世界歴史體系において無數にある。我々はこれを見

る唯一つの眼をもつ主觀の自己意識を要求するのである。ライプニッツの自己意識はなほ對象の方面において考へられたものである。思辨的理性の認識として先驗的對象に限定して考へられたものであつて、それ以上に主觀的方面において考へられたるものでない。この點に注意するのがカントである。カントは實踐理性批判ではこのことを判りと論じ、自己意識の最後の主體である心の自覺に立つて論ずるのであるが、純粹理性批判においてはこの自覺に達するまでの準備は二律背反論をへて十分になされてゐる。しかし十分讀者の理解をえなかつたからカントは二版においては序文を初めとして十分の注意をした。序文で注意したのは一版におけるカントのこの意見によつて述べられたる思辨哲學及びその批判が容易に世間の理解するところとならなかつたからである。思辨的理性の認識では神は如何に高尚なる考の心を直接的に捕へ、その心の中で直接神の問題を解決せねばならぬ。思辨的理性の認識では神は如何に高尚なる考へ方をしてもその神は自分の心の中にある神とはならぬ。他人事の神であるといふことをカントは哲學的に深く考へ、したがつてそのかぎりルーテルの宗教改革の意味を深く哲學的に考へるのであつて、カントはそこにコペルニクス的轉廻の精神を貫徹するのであるけれども、このことは容易に人の理解するところとならず、却つて濱神論的哲學者といふやうな汚名をすら着せられるにいたつた。カントはこれを遺憾として二版では序文で思辨哲學の認識の限界を明かに指摘して、この哲學で把握することのできない自分の心すなはち眞の主觀としての自分の心を捕へる實踐理性批判の自覺的自我の方面に進んでゆくのである。

カントの殁したときはヘーゲルの精神現象學の出るよりも十數年以前である。自然ヘーゲルに對する批判はあらう筈はないけれども、ライプニッツに對する批判は深刻なるヘーゲル批判ともなつてゐるから、ヘーゲルに對するカントの復興はライプニッツに對する關係について考へて見れば分る。カント哲學の最初にして最大の特徴をなすものは先驗分析論における比量的論理的悟性概念であつて、カントはその範疇を先天的時間空間の圖式に媒介して感性的經驗の統一的構成を明かにするのであるが、この外に向つての演繹の根源においてカントはこの悟性と感性との根源であ

る心その物に溯源して感性的要素を心の中に止揚してゆくのであつて、そのかぎりカントはライプニッツと同様に明かに單子的主觀 Subjektmonade を肯定する方向に向つて進んでゆく。ライプニッツは單子から進んで自己意識を考へる。一切を表象として內にもつ單子的存在としての自己意識を考へ、單子的主觀を考へるのであるが、現象をもつて單子的主觀に內屬するものと考へるカントの二版二十六節の意見は正しくこれであるといつてよい。カントは主觀の制約を範疇及び時間空間によつて說明するからそのかぎりでは主觀は形式的概念的なるものゝやうに見える一面をもつてゐることは否定されぬけれども、實際のカントは範疇と感性的內容との統一である心その物に主觀を見るのである。そのかぎりカントでは悟性概念の先天性を自己意識の先天性によつて說明するのであることライプニッツと同じ考へ方であるといへる。カントの感性は概念と獨立に與へられるものであるからライプニッツの單子が表象において一切の感性的なる內容をもつのとは異なつてゐるやうであるけれども、これは比量的論理的悟性においていふことであつて、直覺的悟性においては主觀は同時に感性的內容をもつ點においてカントはライプニッツと同樣に單子的主觀の概念をもつものでなければならぬのであつて、悟性概念を理性の理念に擴張して宇宙的認識の問題に進むときはカントはいよ／＼この思想を確めてライプニッツに一致する。直覺的悟性でカントは比量的悟性の範疇表に見るところの實體とは異なれる個體概念の實體を提起し、そのかぎりにおいて主觀の概念を單子的實體的に進めてゆく。

カントの悟性概念をかう一口にいつて終へば首肯しがたいと思ふかも知らぬけれども、私は前掲の小論文で論じた直覺的悟性概念の認識をまとめて一言にいへばかうなると思ふ。我々は庭の青木の葉を見るときはその色は如何なる因果系列の變化を重ねてゐるかを問ふのではない。たゞ青いから青いと感ずるのであつて、因果系列の變化はこの青の感覺を基礎にして分光鏡にかけるとかその他の物理學的研究をするとかして明かにせられる問題である。感覺は實體的である。カントが經驗の類推において因果の時間繼起の原則を實體の同時存在の原則に根源せしめざるをえなかつた所以はこゝにあるのであつて、事物は特質の總體性よりも全體性において見ればならぬから實際のカントは比量

的悟性の總體性よりも直覺的悟性の全體性の地盤の上に立つてゐる。そのかぎりカント哲學の實體の範疇は比量的悟性の論理的範疇とは異つて、まつたく實體的個體概念となつてゐるのであるからこの範疇をもつ主觀は明かに單子的主觀である。否、主觀といふよりも單子的主體であつて、この範疇を理性の理念に擴張したときはカントにはいよいよ思辨哲學に進み、そのかぎりにおいてカントは明かにライプニッツと同じやうに思辨哲學的に單子的主觀の考へ方を進めてゆくのである。

しかし我々のこゝになほ深く注意すべきことは、このやうな主觀の心はなほ內感の對象として見られてゐるのであつて、心を對象的方面において見るものである。主觀的方面において見るものでなく、眞の主觀の立場を把握するものでないことは嚴正なる批判を尙ぶカントの忘れるところでない。ライプニッツは心は心それ自身を考へることによつて實在・實體を考へ、神その物を考へるといつてゐる。(Monadology, § 29, 30) 單子としての心が自己を考へることによつて神を考へるといふことは心の自覺と神を思辨的同一にまで持つてゆくことであつて、この點におけるライプニッツの心の自覺としての世界歷史の思辨が深きものとなることはすでに述べたところでよく分ると思ふ。

ヘーゲルのイデアでは一切の存在は無差別の絕對として存在するのであるから正直にいふときは個性とか歷史とかいふことは考へられぬ。ライプニッツはこれを無限の差異を有せる個別體の單子として考へるのであつて、この個別體としてそれ〴〵一つの絕對である單子の背後に神を考へ、その豫定調和を見るときは、ヘーゲルの無差別的內容のイデアに無限の差別を認め、歷史の個性を認める。正にヘーゲルの新らしき歷史のイデアを發見するのであるといへる。しかしライプニッツのこの思辨にはなほ問題はないであらうか。我々は神に映された單子として神の歷史をそれ〴〵その立場において作るのであるけれども、かういふ神においてある單子の歷史を見る眼はすでに述べた如く單子の世界にあるのではなく、この世界の外にあるものでなければならぬ。この世界を內在的に超越せるところになければならぬ。內在的に超越して外からこれを見るとゝもに內からこれを照らすものとして內面からその歷史を新たにし

たがらこれを自己のものとする眼がたければならぬ。然らざるかぎりはその歴史的世界は宇宙の歴史的世界であつて、特に我々自身の歴史的世界とはいへぬ筈である。心の中にあつて心を超越する世界歴史を見るのみである。こゝにライプニッツにはなほ深く考へねばならぬ問題がある。これを解決するのがカントであつて、カントは一般に思辨的認識の限界を明かにしながらこれを超克することによつていよ〳〵心それ自體の純粋自覺である眞の自覺の自己意識を明かにする點でライプニッツを超克する。自己意識における最後の主觀としての自我の存在を明かにする實踐理性批判の絶對自我がこれであつて、こゝにカントは明かにライプニッツを超克して眞の單子的主觀を肯定する。

カント哲學が先驗哲學である以上は方法論的にこれを超克する論程を明かにした上でその到達せる實踐的自我を知ることこそ最も必要である。カントは二版で加へた「原則の體系に對する一般的注意」においてライプニッツは單子をたゞ悟性によつて考へるのみであるからその媒介に神性を導入せざるをえなかつた所以を論じ、カント自身悟性概念を理性の理念に擴張して最高原則として無制約者を論理の必然をもつて肯定せざるをえぬ理由を明かにした上で思辨的に考へるライプニッツ的な考へ方を論理的に超克してゆく。勿論カントのこの進み方には論理の必然として無制約者の二律背反の問題がある。ライプニッツが單子を悟性によつて取り扱つたのに對してカントは理性の理念をして論理の必然をもつて無制約者の存在を肯定し、神の存在を肯定するのであるからライプニッツのやうに單子に對する神の豫定調和を假定する必要はない。論理の必然をもつて肯定する。しかし同時にまた論理の必然をもつて無制約者の永遠に對して永遠ならざる時間を承認せざるをえず、二律背反を承認せざるをえぬやうになるから、カントはライプニッツの假定を切り拔けるとゝもに又新たにライプニッツ以上の難關に接せざるをえぬ。カントがこの二律背反の問題を漕ぎ拔けていよ〳〵心の絶對自覺において新らしい神の問題を解決するまでに達する途は容易に拓かれる性質のものではない。カントは荊の多い哲學の途を開いてゆくから迂餘曲折の途を通らざるをえなかつた。しかし實際をよく見るときはその迂餘曲折と思はれるところの問題は時代の哲學としては考へねばならぬ問題である。カントは思

辨哲學においても永遠者とその否定契機について深く考へ、思辨哲學で許されるだけの永遠の問題を考へるとゝもにその限界を公平に反省してその次ぎの問題に進むのであつて、思辨的論理の二律背反論から實踐理性の問題に進む場合においてもカント哲學は整然たる論理の終始一貫せる方法をもつてゐる。二律背反論はカントの思辨哲學では往き詰れる問題であることは否定されぬ。永遠者を肯定するとゝもに一時的なるもの永遠ならざるものを肯定せざるをえず、進退兩難に陷つたことは事實である。人間における永遠者の問題はこの二律背反の問題を如何ともすること能はぬ。正直にこれを受け容れる外ない。しかしカントは正直にこれを受け容れ、具體的には神の永遠に對する時間の非永遠性を承認するの外なく、したがつて永遠者を一時的なるものゝ中に實現するの外ないことを認める。そのかぎりカント哲學は思辨的に大なる苦惱に陷らねばならぬのであるけれども、これを先驗的超越的方法によつて切り拔けてゆく。時間は永遠でない。しかしながら永遠者は時間において現はれねばならぬのである。イデアは無限の多樣をそれ自身の中に呑み込みながらこれを自己の中から永遠に永遠者として發展せねばならぬ。したがつてイデアには永遠でないものを永遠者として發展するものがなければならぬ。イデアにおいて永遠ならざる時間が永遠とならねばならぬのである。私はこの點においてカントの先驗辯證論には大なる苦心の研究がつまれてゐるものと考へ、カント哲學の特色を最もよく示すものがあると考へる。カントの時代には無といふことはまだ哲學の問題となつてゐない。その後も永く問題とならなかつたのであつて、現代のハイデッカーにいたつて初めて問題となつたほどであるから荊の途を拓くカントの批判哲學に無の問題が現はれてこぬのは怪しむに足らぬところであるが、事實においてカントは先驗辯證論ではすでに內感の時間空間の圖式概念において無の問題を提起してゐるのであつて、カントの二律背反の時間は空間を媒介にし、その自己否定の無を媒介にして永遠の時間となる。ライプニッツの豫定調和もたほ有の世界である。カントが論理的必然的にこれを超克するといふことは空間の無に媒介してその先驗的超越の境位を超越的內在の新らしき境位に發展するといふことである。カントでは理念を客觀的に使用するときは超越 transscendent であつて、カ

ントはいきたりこの客觀的使用を許さぬことは勿論であるけれども、その先驗的使用の慎重なる吟味をへてその純粹性において時間を超越する空間において客觀的使用を承認するやうになるのであることは我々の特に注意せねばならぬことであるが、思辨的理性から實踐的理性に進める場合の理念の客觀的使用の先天的場合となるものは道德的格率であることはいふまでもないところであつて、カントはこゝに道德的自律の格率の先天的場合として永久善の客觀的實在を承認せざるを得ぬやうになるところに神の存在を肯定し、しかも人間に原罪を承認せざるをえぬ點において我々人間の實踐的自我の大なる根本的特色を發揮し、したがつて歷史的社會的なる人格に實存的歷史の根本的性格を與へてゆくのである。

論理的悟性の認識では人の知る通り主觀の制約は外的世界形成の制約として考へられ、理性のイデアの先驗的使用の場合においてはこれを範疇に聯關せしめ、したがつてまた時間空間に聯關せしめて經驗の統一及び連續を明かにするに力を用ひてゐることは忘るべからざるところである。新カント派はこの方面に注意してゐることは否定されぬ事實であつて、カントはこの方面においては科學の基礎を作ると同時に獨斷的形而上學を排斥して神とか永生または自由とかいふ問題は徒らに經驗を乘り越えてその彼岸において考ふべきものではないことを、明かにする點において大なる成功を收めてゐることは人の知る通りである。カントではこの態度は最後まで執るところであつて、道德を通して見られる宗教において神と原罪の深き惱みに陷れる場合にもカントは宗教を單なる理性の限界内において考へ、その理念の合理的實現を期することは人の知る通りである。我々はこれを忘れてはならぬが、カントはこのやうに外に向つての理性的合理的實現の内面で、内に向つての内感の時間空間の媒介によつて理知的に自我及びその内在的超越の客觀的世界の形成を深めてゆくところにその哲學の本來の課題をもち、コペルニクス的轉廻を徹底して人間の理性的實踐的存在の權威を固めてゆくのをもつてその哲學の本來的使命とするのであつて、思辨的論理を超克してカントはいよ〳〵自己意識の中における最後の主觀としての心その物の自覺に返るときは（純粹實踐理性一般の要請につい

て）眞實の意味において自覺的自我を發見し、この自我において改めて神の存在を考へ直すとゝもに心の自覺の中にある神の國としての目的論的世界を明かにする。ディルタイやベルグソンは新カント派のカントを見て血の氣のない色のあせた論理的自我概念を抱くものとしてゐるけれどもカント自身は決してさういふ自我概念を抱くものではなく、ルーテルの宗教改革を哲學において明かにするものとしてその論理は實際においては最も血の氣の多い活きた宗教的人格をライプニッツ以上に問題とするために力をつくすのである。

この間における論理は非常に込み入つてゐる。私は次節でカントの歴史的事實の世界に對する先驗統覺の問題について論ずる場合に述べる。只今のところでは思辨的論理に對す實踐的論理の克服について考へねばならぬが、この克服はカントの先驗的超越では心それ自體の自己否定による背後への躍進である。ライプニッツの豫定調和においてのやうに世界歴史は神においてあるものとして本質において理想的に進行するのであるけれども、同時にまたその豫定調和は神の自己否定によるものとして無調和の恐るべき狀態におかれ、ライプニッツで豫定調和の下におかれてゐると考へられる單子は豫定調和とその否定の矛盾的統一の實存的性格の下におかれてゐる。客觀的世界はこの單子の實存的歴史的世界である。それ自體歴史の主體であるといふことはこの實存的歴史の主體であるといふことであつて、世界歴史は人間の自覺たゞ一つによつて根本惡と淨福との一致せる存在ともなりえるがまた同時に根本惡と不幸との結合せる存在ともなりえる。前に述べたエクハルトもかゝる人間の危機に立つて人間に說教せるものと見ることができるであらう。我々は實存的にはかう深く考へることができる。すべての人間はかういふ點においては實存的に深き自己意識をもつてその歴史を作るのである。我々自身も勿論この意識をもつてその歴史を作らねばならぬのである。しかしこの歴史を見る眼はこの歴史的世界の中にはない。これを超越せる外にあるものでなければならぬ。我々はこの世界の人々と同じ實存的自己意識をもつて彼等と同樣に歴史を作りながらなほ同時にこれを超越して自己もすべての人々と同じやうに實存的意識で歴史を作りながらなほ內面的超越においてこれを外から見、すべての人々がその歴

史を作れることを理解しながらこれを尊重し、その歴史の根本的理念に對しては宗教的道德的主體の自我の上に立たねばならぬ。これがなければ世界歴史は思辨的に如何に高尚なものであつても畢竟無意味である。我々は進んで思辨哲學的にそれ自體で神の歴史を作れる客觀的世界を超越しながら内からこれを動かすべきプーキメデスの梃を自己自身にもたねばならぬ。そのかぎり我々は唯我論的自我をもたねばならぬのである。

しかしこのやうに考へるときは同じ思辨哲學者であつても、ヘーグルやライプニッツと異なり、また神祕哲學者エクハルトとも異なつてフッサールが主觀的方向に向つて進む點で、思辨哲學的にカントに接近しながらカントを離れてゆくのが一層注意される。フッサールを理解することが一層痛切な意味でカントに返らねばならぬことを教へる。故に私は次ぎに少しくフッサールの哲學について考へて見たいと思ふ。

すでに述べたやうにフッサールの哲學の中心問題とする形相的個別體は一切の時間を超越し、したがつて一切の變化を超越する絶對性において考へられるものであるが、これは超時間的絶對性において思辨的同一哲學的に考へるものである。したがつてそのかぎりにおいてフッサールの根源的絶對體驗は思辨的に存在の眞理を見ても現實具體的なる實存の眞理を見るものではないといへるのであつて、氏のやうに現象學的還元の根源的體驗に判斷の根據を求めても、それが認識論上我々の現實具體的なる地上生活の眞理に關するといふことにはならぬ。こゝに認識論上から見て氏の根源的絶對體驗にはなほ深く考へ、その思辨的同一哲學のイデア的眞理を超克せる背後のエクジステンツ的眞理から見直さねばならぬ必要があるのであつて、然らざるかぎり氏の哲學では我々人間の地上生活における現實具體的なる經驗の事實根據は明かにならぬ。フッサールのやうに現象學的還元の絶對體驗に統一の根源を求め判斷の根源を求めるのでは、その統一及び判斷を抽象的に形而上學化して終ふ。フッサールの自ら高調するところにしたがへば哲學は周知のやうに純粹なる絶對的先驗的意識の學であつて、氏はこの根源的意識において純粹なる本質存在の學を

見ようとする。すなはち先驗的絶對體驗の意識において存在の本質學的世界を見ようとするのである。しかし氏の哲學ではその本質的世界は思辨的論理の同一哲學におけるものに過ぎぬのであるから、一切は本質において永遠であるといつてもその本質が一切において永遠であるといふ現實はまだ把握してゐるのではない。哲學本來の問題は明かになつてゐるとはいへぬ。

こゝにはたゞ先天性をしか見ぬ大なる缺點がある。フッサールはこの本質直觀の根源的體驗において明證があるといふ。しかし明證といふときはデカートの直接的體驗の我においてのやうに我が我を見るものでなければならぬことは勿論であるから、フッサールのいふごとくに根源的絶對體系にかゝはるものでなければならぬことは異論がないとしても、同時に對象にかゝはるものでなければならぬ。對象なくして明證といふことは考へられぬことであるから、フッサールの哲學でいふならば本質直觀にかゝはるものであることは異論がないにしても、その本質直觀なるものは具體的事實の存在にかゝはるものでなければならぬ。心その物の根源的絶對體驗では心が心それ自體を見ると同時に對象を見るものでなければならぬ。卽ち心の自己否定において見られる存在と自己意識とにかゝはるものでなければならぬから、ヘーゲルの哲學でいふならばイデアの自己否定によつて見られるエクジステンツにかゝはるものでなければならぬ。フッサールのノエマはヘーゲルのイデアにおいて同一化されたるものではなく、ライプニッツの單子においてのやうにそれ〴〵その立場において獨立の存在を有するものでなければならぬのであるから、ヘーゲルのイデアの自己否定において見られるエクジステンツにおいてのやうにノエシスの自己否定において見られるノエマでなければならぬ。ノエシスの否定契機のノエマでなければならぬのである。ノエシスの自覺において內面的超越的に與へられるものでなければならぬのである。自己が自己を見る心の自覺としての自己意識には內在的超越的對象として與へられるものでなければならぬのである。

フッサールの根源的絶對體驗の本質直觀は一切の時間を超越せる形相的個別體の思想によつて最もよく示すやうに

まつたく思辨的論理の同一哲學を脱せぬ。我々はたほその背後に溯つて實存的論理のエクジステンツを見るときに根源的絶對的體驗の自己意識において我を見ると同時に對象を見ることができ、明證の直接的根源を把握することができるのである。この意味で私はフッサールの本質直觀とか根源的絶對體驗とかいふものはその背後に向つて切り下げられるところに眞の哲學的根據を求めねばならぬと思ふ。フッサールは先驗的還元において本質的存在を直接的明證において把握しえると考へるけれども、一切の時間を超越し、したがつてまた同時に一切の變化を超越せる形相的個別體なるものは實は一切の差別性をすてゝ思辨的同一哲學でノエシスと同一化されたノエマである。いはゞイデアの想像的空間において一切の差別性をすてゝ平等に存在するものであるから本質的個別體といふことはできぬ。したがつて適切な意味では對象となること能はざるものである。したがつてこれを認識に發展することはできないものである。ヘーゲルのイデアに止揚された思辨的同一哲學の事物が認識に發展すること能はぬのと同一である。ヘーゲルはその思辨的同一哲學のイデアの自己否定によつてエクジステンツを見るときに對象の側においてライプニッツの單子を見ることがその哲學の根源問題でなければならぬやうに、またフッサールの形相的個別體といはれてゐるものはライプニッツの單子にまで發展せられて見變へられるのでなければならぬ。しかしこの單子はそれ自體獨立である。他の單子と交渉すべく聯關すべき何等の途をもそれ自體の間にもたぬ。形相的個別體をライプニッツの單子にまで引き上げねばならぬフッサールの根源的體驗はライプニッツの單子を容れるものであると同時にその關係を結びえるものでなければならぬ。ライプニッツの豫定調和の立場に立つて、すべての單子的存在をそれ〳〵獨立自由に活動せしめえるものでなければならぬ。單子を背後に包んでこれを活動せしめるものでなければならぬ。單子の中において單子をその背後に超越しながらこれに内在してこれをたしえるものでなければならぬ。單子を超越し、したがつてそのかぎりにおいては單子を離れたるものでありながら單子に内在し、したがつて單子を堅く結合せるものでなければならぬ。こゝにフッサールの根源的體驗の自己意識は單子に新らしき豫定調和的性格を與へながらこれをその内容とする

といふ問題を生ずる。フッサールも思辨的同一哲學であるかぎりライプニッツ的に考へられる。

しかしこれもなほ思辨哲學において對象的に見られる自己意識においてゞある。眞の自己意識においてはかういふ自己意識の作る歴史的世界を對象にもつ唯我論的立場にある自己意識としてかういふ世界その物を直接的明證におくものがなければならぬ。有限的對象の本質はイデアの絶對性によるものでなければならぬことは勿論であるけれども、存在するものに關する我々の知識の絶對性によらねば明がになるものではない。この意味でヘーゲルのイデアに止揚せられるとか、フッサールの形相的個別體として現象學的還元をえるとかいふことは必要であること勿論であるけれども、たゞイデアに止揚せられるとか現象學的に還元せられるとかいふ點において永遠の眞理を有するのみでなく、實際存在するものは絶對であつて、我々はその絶對に關する知識をえねばならぬのである。存在するものはイデアの弱められたる存在ではない。その固有の新らしき存在である。我々はこの存在に關する知識をえねばならぬ。我々の存在するものに關する知識は絶對でなければならぬのである。我々はこれを充足理由律によつて知るのでもない。また有力原因によつて知るのでもない。況んや因果關係によつて知るのではない。たゞ自己否定によつて知るのである。自己の奥底に自己を否定して知りえるものは客觀的に獨立の世界である。それ自體獨立の存在であり、ライプニッツの單子の如き存在でなければならぬ。この存在はまたそれ自體獨立であるだけに自己否定の獨立活動によつて自己の奥底に一つの共同體を發見し、神の世界を發見してその世界においてある故に眞の獨立的單子としてそれ〴〵その立場において活動しながらそれが世界的統一の活動であることを明かにするのである。世界のすべては歴史的主體として純粹自己意識の立場でそれ〴〵その歴史を作つてゐる。世界のすべての存在はその自己意識の直接的明證において神の世界歴史を作り、その先天總合判斷の明證において永遠の世界歴史の存在を明かにしてゐるといへる。

しかしこれはなほライプニッツの考へ方をその立場において押し詰めて考へるものである。思辨哲學を最後まで押

しつめたものとして歴史の客觀的世界の理解である。客觀的世界は死んだものではない。それ自體神においてあるものとして活きた生命を有し、それ自體で自己の歴史を作つてゐる。否、宇宙の歴史を作つてゐる。神の歴史を全體的に作つてゐるのである。ヘーゲル的にいへばイデアの辯證法によつて作れる世界歴史であるといへる。しかし我々はなほこれを見る眼を別にもたねばならぬ。世界それ自體は獨立の歴史的世界であつて、その中のすべての存在は豫定調和的に獨立の歴史を作つてゐる。したがつてそのかぎりそれ〴〵一つの純粋自己意識といふことができる。神の純粋自己意識としてそれ〴〵歴史的主體であるといふことはできる。我々人間は勿論この主體である。しかし我々はなほこの主體として歴史を作れるものを見るべき立場をもたねばならぬ。併しこの立場はこの歴史的世界の中にはない。これを超越せる背後になければならぬ。我々はこの主體として歴史をすべての人々と同樣に作り、したがつてすべての世界の存在と同樣に作りながらこれを内在的に超越して見る立場をもたねばならぬ。現にこのやうなことを論じてゐる私はこの世界の外に立つてこれを對象として見ながら論じてゐるのであつて、我々は誰人もこの世界を内在的に超越して外からこれを見ながら同時に内在して内からその歴史をすべての人々に作らしむべき立場をもたねばならぬのである。この世界に規定されながらこれを規定せねばならぬ。唯我論的自我の立場をもたねばならぬ。思辨哲學に對しては、カントは實踐哲學においてこの自我の立場をとる。私はこれを認めまいとするところにカントの先驗を先天と間違へる大きな誤があると思ふ。

フッサールがこの自我と客觀的世界とを見るにいたらぬことはワッグウェルによつても指摘されてゐる。純粋經驗はこの二つの統一にある。佛教哲學では人も知るやうに唯識論的自我と華嚴哲學の世界とを肯定し、その關係において眞の哲學を求めねばならぬ立場に否應なしに進んでゆく。私はこゝに佛教哲學は深き興味の問題を提起してゐると思ふ。しかもアラヤ識として人間意識において唯識論的自我を肯定し、これと對立する華嚴哲學の客觀的世界をもち、この兩獨立契機の内面的相互規定において認識を見、佛智を明かにしようとする辯證は我々から見て最も關心の深い

問題でたければならぬ。私は歴史主義と歴史哲學について論ずるとき自然この問題にふれたいと思ふが、こゝでも以上述べてきた範圍内の問題を明かにするために一應述べておかねばならぬことが柄がある。すでに述べたところで分るやうにこの客觀的世界と絶對自我とは根源的に絶對的に統一されたものでありながら絶對的に分離せるものであつて、絶對的に對立せる極にあるから辯證的に内面的相互媒介によつて一つに統一されるのである。佛教にいふ億劫相分而須臾不離、盡日相接而刹那不接といふことは佛と人間との關係において說かれることが多い。しかし私は最後の場合にはこの二つの獨立契機の關係についていはるべき語であると思ふ。すでに述べた如くヘーゲルのイデアよりもライプニッツの豫定調和の方が歴史を說明する眞理を深くもつてゐるが、たゞ假定的である。カントはライプニッツの假定を理性の必然にまで高めると同時にその必然の豫定調和をもつて人間社會に實現すべき方法を發見する。卽ち眞に神を實現すべき無限の時間を發見する。この時間に内在する先驗的超越の空間こそ神は永遠に人間を離れて而して人間に接する契機を明かにする場所であり、永遠の靜と動とを說明すべき神と人間との關係を明かにする場所である。私はカントの實踐理性批判の絶對自我においてよくこのことを見ることができると思ふ。カントはこの自我の奥底に先驗的超越において神の内在する人間の問題と人間の宗教生活の先驗的超越において目的論的世界を提起して結局この二つの獨立契機の自我と世界との相互的内面的關係の相互否定の辯證法的關係において最後の哲學問題を考へるところに進んでゆくやうに、私は佛教哲學のこの言葉も哲學の問題としては佛教自身の哲學でいふならば華嚴の世界と唯識の人間との關係を說く場合の言葉として考へたい。勿論この關係はすでに述べたところで十分明かであるやうに思辨的ではない。辯證法的であつて、何れの側から見てもその獨立契機の自己否定による相互媒介の外に相關係する途はなく、獨立であるから自己否定によつて自己の奥底に他の存在を肯定する點で一致する外ないのである。先天總合判斷といふことも最後の場合にはこの相互否定の辯證法的關係より外には考へられぬのであるが、この關係においては我々は自己を超越せる客觀的世界に自己を媒介して自己否定的に自己を實現する。全く實踐的である。存在の本

質はヘーゲル哲學の思辨的イデアよりも深く、ライプニッツの絶對的超越の豫定調和よりも深き眞理のイデアによつてゐる。我々の知識はこのイデアの超越的內在に關するものでなければならぬから深く物自體にかゝはるものがある。有限の對象はかういふイデアの弱められた存在ではない。その新らしき固有の存在である。我々の知識はこの新らしき固有の存在としてのイデアに關する知識であるから絶對でなければならぬが、その絶對でなければならぬといふ意味はこの絶對的對象の構成にかゝはるものとしてすなはちこれを作るものとして認識であると同時に行爲であるといふ意味においてゞある。

かういふ絶對的知識の認識は絶對者の自己否定である。直觀といつても實は直觀すべき對象があるのではない。無が對象である。直觀するものとせられるものとが完全に一致してゐる。直觀一般といふことをいふことができるであらう。世界それ自體といふこともなく、精神それ自體といふこともない。無を對象とし媒介とする點においてこの兩者はまつたく一致してゐる。初めて我々は生命といふものを根源的に見ることができる。理性的といふよりも意志的である。しかも直覺的である。意志の根源において直接的明證をもつてゐる。意志的理性であり、理性的意志である。實踐理性であるといふことができる。認識が行爲であるといふ絶對自我はかういふ意味で宇宙の根本的生命を實現する行爲者であるといふことである。フッサールの絶對自我もかういふ行爲的主體でなければならぬ點でその意味を一新せねばならぬ。カントはこゝに復興するのである。

こゝにいたるときはライプニッツの豫定調和を超克する點において理念と範疇と感性的內容との一致を見るカント哲學の範疇は根源的に宇宙的生命と一致し、ライプニッツの豫定調和を實現すべきものとならねばならぬから、復興するカント哲學それ自體はまつたくその範疇を新たにするのを初めとして根本的にその原理及び體系を一新するところがなければならぬことを否定されぬ。したがつてそのかぎりにおいて復興すべきカント哲學は三批判によつて見られるものとは根本精神においては勿論異なるところはなく、まず〳〵これを明かにするものでなければならぬことは

異論がないけれども、その根本精神を實現する方法及び體系はまつたく一新せるものとして、これまでのものとは可なり異なれる體系とならねばならぬといふことになる。第一に先天總合の範疇はカント自身その範疇表において見るものとは異ならねばならぬ。實體の範疇は範疇表において見るところのものと異つてゐることはすでに述べたが、それ以上にアリストートル的生命の世界歴史的發達の範疇として類種の範疇とならねばならぬことは勿論、なほ根本においてヘーゲルの精神現象學において見る純粋なる自己發展的自己意識もなほ思辨的論理の同一的自己意識としてその背後に徹底して、ヘーゲルのイデアの思辨的同一哲學では見られないエグジステンツの自覺的實踐的自己意識の眞に發展的なるものを見るのであるから、カント哲學の根本的範疇は實踐的理性の自我の發達を根本的範疇とする類種の歴史的發達の範疇とならねばならぬのであつて、主觀的制約による客觀形成の哲學はまつたく一新せねばならぬ。釋迦の涅槃像において見る萬物は類種の歴史的範疇と見るべきであらうが、なほ思辨的であると思ふ。これを實踐的に一層深き意味のものとなし、その上で宗教的にカントにおいてのやうに深き意味のものとなさねばならぬ。この意味で復興するカント哲學はその範疇を根本的に一新するのを機會に哲學體系を一新せねばならぬ。カントの先驗統覺はこの範疇による歴史的事實の世界の客觀形成でなければならぬのであつて、獨立的自我の客觀的獨立の世界に對する關係はこの新らしき範疇による先驗統覺でなければならぬ點において改めて新らしく考へられる問題をもたねばならぬ。次節でこの問題について考へて見る。以上述べたカント哲學の復興についてもなほ述べねばならぬこと柄であつて述べる餘裕のなかつたものも幾分述べられると思ふ。（未完）